



ハシェク伝の問題点およびチェコにおける『シュベイク』解釈史について

著者	土肥 美夫
雑誌名	人文學
号	106
ページ	40-57
発行年	1968-08-05
権利	同志社大学人文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000002747

<研究ノート>

ハシエク伝の問題点およびチェコにおける 『シュベイク』解釈史について

土 肥 美 夫

1

チェコの作家ヤロスラフ・ハシエク (Jaroslav Hašek, 1882年生～1923年没) の小説『世界大戦中の善良な兵士シュベイクの冒険』(Osudy dobrého vojáka Švejka za světové války, 1921–1923) が、第一次世界大戦におけるオーストリア・ハンガリー帝国の崩壊とともにともかく曲りなりにもその支配下から宿願の独立をかちとったチェコスロヴァキア共和国の「民衆」に苦難にみちた過去を哄笑のうちに葬り去る国民的な作品として非常な好評を博したことが、チェコスロヴァキア国内だけでなく、その後直ちに欧米各国、さらには日本でも翻訳され、反戦小説の傑作として広く全世界で愛読されたこと、その結果、作者ハシエクについてはなにも知らないひとびとにも《シュベイク》といえ、たとえばドン・キホーテやサンチョ・パンサのように、ある一定の典型的人物像を描きうるまでに深い影響を与えていること、そのような事情は、少くとも文学にたずさわっている者にとっておそらく周知のことであろう。

1 日本訳は二つあり、ひとつは戦前辻恒彦訳で出版された『勇敢なる兵士シュベイクの冒険』で、この翻訳は戦後『二等兵シュベイク』と改題され、上下二冊に分れて三一書房から新書版で出ているが、これはドイツ語からの重訳であり、しかも抄訳であって、原書の意図をくみとるには極めて不完全なものである。それに反し、筑摩書房の《世界ユーモア文学全集》の第14・15巻として刊行された栗栖継訳『兵士シュベイクの冒険』上下二巻は原典からの完訳であり、訳文もすぐれている。ちなみに、1926年に出た Grete Reiner の独訳も „Die Abenteuer des braven Soldaten Schweyk während des Weltkrieges.” (この独訳はその後版を重ね、現在は Rowohlt 社の文庫版にもはいつている) となっているが、原語の „Osudy” は「冒険」というよりも「運命」 („Schicksal”) の意、 „dobrého” は「勇敢な」 („tapfel”) というよりも「善良な」 („gut”) の意である。

しかし、『世界大戦中の善良な兵士シュベイクの冒険』（以下『シュベイク』と略記する）が作者の予期を遙かに越えて全世界に反響をまきおこし、ポピュラーな人気ばかりでなく、チェコ内外の作家の創作にすら影響を与え、たとえばブレヒトをして、「もしわたしの意見で世界文学にはいる今世紀の文学作品三つをあげるようにとたずねられたならば、そのひとつはハシュクの『シュベイク』だとわたしは答えるだろう²」といわしめている、そのような広く強い関心にもかかわらず、これまで作家ハシュクについて信頼のおけるビオグラフィーも、モノグラフィーも、作品に関する学問的な研究も、まとまった著述がほとんどなされなかったのはどうしてだろうか。

私は、プラハのドイツ語作家たちを研究している過程で、チェコ文学、特にその近代文学にも次第に強い関心を持つようになったのだが、残念ながら私の関心をみたくしてくれるドイツ語の文献はこれまでほとんど見出せなかった。私の眼にふれた限り、チェコ出身のドイツ語作家・批評家 F. C. Weiskopf³ だけが唯一の例外だったが、彼のチェコ文学史やチェコ作家に関するニッセイも大部分がそのときどきの要請によって書かれた短かいものばかりで、私がとりわけ関心を抱いている第一次大戦前のチェコにおけるアナーキズムと文学の関係、大戦後のコミニズムと文学の関係については全然ふれられていない。その本には、ハシュクのほか、代表作『プロレタリア・アンナ』で知られるイヴァン・オルブラフト (Ivan Olbracht, 1882~1952)、わが国でも表現主義戯曲が紹介された頃すでに『人造人間』『蟲の生活』『マクロボウロスの秘密』など S. F. メロドラマ風な戯曲が翻訳され、戦後は『山椒魚戦争』のような諷刺的な小説や童話も訳されて、かなり名の知れている カレル・チャペック (Karel Čapek, 1890~1938) など、私に関心のある両大戦間のチェコ文学を代表する主な作家・作品もとりあげられている。しかしそれらは、いずれも Literarische Streifzüge と題されているように、著者のいわば「文学的遍歴」を語る文章であって、文学研究的な仕事の成果ではない。ドイツ・オーストリアにおけるチェコ学 Bohemistik は、私の浅学のせいばかりではなく、戦後しばらくして、特に東独からその成果の一端が

2 ちなみにブレヒトが特に好んだチェコ作家はハシュクのほかに Kafka と Bezruč だった。W. Mittenzwei の論文: Brecht und Kafka (1966) 参照。ただし本文中の引用は John Willett: The theatre of Bertolt Brecht, 1959, S. 102.

3 Franz Carl Weiskopf (1900~1955): Gesammelte Werke VIII, Über Literatur und Sprache, 1960, Dietz Verlag Berlin.

公刊され始めたというのが現状のようで、留学中知り合いになったチェコのゲルマニストにきいてみても、アナーキズム・コミニズムが主流を占める時代のチェコ文学史に関するドイツ語文献はいまのところ見当たらないとの返事であった。ところが最近になって、私の関心にかなう文献が二冊手にはいった。Pavel Petr: Hašek's „Schweyk” in Deutschland. Rütten & Loening Berlin, 1963. (パヴェル・ペトル著『ドイツにおけるハシエクの“シュベイク”』)という研究書と、Gustav Janouch: Jaroslav Hašek. Der Vater des braven Soldaten Schweyk. Francke Verlag Bern und München, 1966. (グスタフ・ヤノーホ著『ヤロスラフ・ハシエク。善良な兵士シュベイクの父』)というハシエクのビオグラフィーである。前者ペトルは、南チェコ、モラヴィアのブルノに住むボヘミスト・ゲルマニストで、彼のハシエク研究はライプチヒ大学の博士論文として提出されたものをさらに補充し出版したもので、いろいろと問題の多いハシエクの伝記を確認する作業から始めてチェコ本国及びドイツにおける『シュベイク』解釈の歴史、とりわけ Grete Reiner のドイツ語訳の問題とピスカートル及びブレヒトによる戯曲化の問題に重点をおいたところの、おそらくドイツにおける最初の学術的なハシエク研究書である。後者のヤノーホはすでに『カフカとの対話⁴』でわが国でも知られているプラハの作家・評論家であるが、彼のハシエク伝もまた外国語で書かれた初めてのビオグラフィーではないかと思われる。

この二つの成果をふまえながら、まずハシエクの伝記のうち大戦前のアナーキストの時代と入隊後ロシア軍の捕虜となりコミニストに転向した時代のこと、次にチェコにおける『シュベイク』解釈史の問題をここでとりあげ、古い歴史と文化をもちながら長い圧制のもとに苦しんだチェコ民族の独立前後における政治と文学の問題について、その一端を紹介したいと思う⁵。

4 Gustav Janouch, Gespräch mit Kafka, 1951. (これには未刊の増補版があり、吉田仙太郎訳『カフカとの対話』はそれによっている。) 著者にはそのほか、Franz Kafka und seine Welt, 1965. 及び Prager Begegnungen, 1959. などがある。

5 Petr が詳論している「ドイツにおけるシュベイク解釈」は、特に、„Schweyk im zweiten Weltkrieg”を書いた後期のブレヒト論と関連する興味ある問題なので、別の機会に「ブレヒトとハシエク」というテーマで執筆するさい改めてとりあげることになしたい。

2

さきにあげた疑問、何故ハシェクの学問的研究がたち後れているのか、という問題にたいし、ペトルはその理由として二つの大きな要素をあげている。第一に、作者ハシェクとその作品は、多くの民衆に愛読されたにもかかわらず、第一次世界大戦後の新生チェコスロヴァキアの政治権力がブルジョア民主主義者によって掌握されたため公式の文学研究者・批評家から無視され、書店からも本の販売を拒否されたという、政治的世界観的理由。第二に、『シュベイク』の文体が伝統的な文芸学の規準・方法によっては認められ難い「非文学的」な言語で書かれていたという文学上の理由である。この二つの要素は、ここでとりあげる伝記上の問題および作品解釈の問題とも関連しているので、これからの論述にそうてさらに明瞭にされるであろうが、研究を困難にしている事情として、なお、全集遅滞の問題があげられる。戦前の全集16巻(1924～1929)は、416の作品を収録しながら、それでもなお全体の3分の1程度といわれており、手稿がほとんどなく、しかも寄稿雑誌のうち図書館にも残されていないような大衆誌・ユーモア雑誌などがかなりあり、そのうえハシェクは本名のほか匿名、偽名、変名を今までに判明しただけでも105種使用したというような事情もあって、テキストクリティックに基づく完全な全集の出版はいまのところ望みえず、目下、これまで確認された約1200の物語、諷刺、ユーモア、グロテスク、スケッチなどの作品がズデナ・アンチーク(Zdena Ančík)により19巻予定のQuellenausgabeとして刊行中の段階にとどまっている。このような全集出版の困難さは伝記についてもそのままではまる。つまり、ハシェクの作品は、彼自身「金もうけのために書く」というように、即興的に短時間に書きあげられたものが多く、それも自己の生活体験や身辺の見聞をもとにしているのだが、作品としては当然、*dichten*, *erfinden*, *übertreiben* されているので、作品そのものが伝記的事実とはなりえないし、また、彼のボヘミアンの性質、反小市民的の反権力的生活態度からして、突然の蒸発、放浪、巷における警官とのいざこざ、デモ、潜行、逮捕などスキャンダルやセンセーショナルな事件が絶えず、従って彼の友人の語る想い出話やエピソードが伝記の主な資料としてとりあげられるにしても、ハシェクの行動と口述自身に彼独特のミスティフィケーションが含まれている場合が多いため、他人の証言をどの程度信頼しうるかという

疑問がいつも残されているのである。

さて、以上のように、私は、ペトルの著書を読んで初めてハシェクの伝記や作品の研究がまだ未開拓の状態にある事実とその理由を知ることができた。チェコ国内においてすら、ようやく1960年になって初めて、学問的研究にもとづくラトコ・ピトリークの『シュベイク』小説並びにハシェク伝のビブリオグラフィー⁶が刊行されたのである。栗栖氏の日本語訳『シュベイク』下巻「あとがき」にはハシェクの伝記の概略がのべられているが、これもピトリークの研究を中心に刊行中の全集編集者アンチークおよびハシェクの友人で『シュベイク』小説に挿絵を描いたヨゼフ・ラダの伝えるハシェク像⁷によって書かれているようであるし、ペトルのハシェク研究もピトリークの業績が前提になっている。それにたいしてヤノーホのハシェク伝は、伝記上の資料やビブリオグラフィーを駆使しながらも、ハシェクの友人・知人とヤノーホ自身との対話覚書をそのなかに組みいれているところに特徴があり、伝記記述のスタイルもペトルのような学究的態度よりもむしろ伝記作家的な態度によって貫かれている。それはともかくとして、ここで重要なのは、伝記上の事実の取扱い方についてペトルとヤノーホの間はかなり相違がみうけられる箇所が若干あり、その相異のニュアンスあるいは、明瞭なくいちがいが、ハシェク文学の解釈にも大いに影響してくることである。その相違点をハシェクのアナーキスト時代とコムニスト時代に限って検討しながら、『シュベイク』解釈史の問題にはいつてゆきたいと思う。

3

ハシェクがアナーキストの運動に積極的に参加するようになったのは、彼が商業専門学校卒業後就職した《スラヴィア》銀行から度重なる放浪癖の廉で2年後に解雇された1904年の頃だとされている。当時のチェコのアナーキストたちがどのような思想をもちどのような運動をしていたかについて詳しいことはわからないが、アナーキズムが現存の社会秩序に不満をもつ知識人・労働者に強い魅力を与えていたことは間違

6 Radko Pytlík, Miroslav Laiske, Bibliografie Jaroslava Haška, Prag 1960

7 Zdena Ančík, O životě Jaroslava Haška, Prag 1953 及び Jaroslav Hašek ve fotografii, Prag, 1959. (Josef Lada の証言を含む)

いなく、スティルナーなど西欧系の個人主義的なアナキストよりも、バクーニン、クロボトキンなどスラヴ系の集団主義的なアナキストの影響の方が強かったようである。ハシェクは、学生時代からカーハ⁸のアナーカルなパンフレットに寄稿していたらしく、退職後は当時の代表的なアナキストの一人で後チェコ共産党創立に参加した詩人ノイマン⁹の講演会、その他秘密のアナキストのクラブをしばしば訪れたといわれている。その頃のアナキストたちをピトリークは二つのグループ、文学的アナキスト (die literarischen Anarchisten) と、民衆的アナキスト (die „Volks“-Anarchisten) とにわけている。前者は無制限の個人主義思想に基づく精神性の強いエリート的性格のグループで、ノイマン、オルブラフト、マイエローヴァなど後にコミニストに転向した詩人・作家たちがそれに属しており、後者はより広い集団のもとで労働について語るグループで、ハシェクは学生時代から作家を志していたがむしろ後者のグループにはいっていった。そしてその傾向は、ハシェクが、プラハを去って鉱山労働者になったとき、そこのアナキズム宣伝誌〈青年 (Omladina)〉を主宰するカレル・ボフリゼク¹⁰と知り合ったことによって、強められ、連帯的地盤をもつものへと発展した。その後プラハに帰って自由文筆家としての貧しく苦しい道を歩むようになってからも、彼はひきつづきボフリゼクを助けて、発禁あるいは発行地変更の度毎に改名された〈新青年 (Nová Omladina)〉、〈貧民 (Chud'as)〉、〈コミュニオン (Komuna)〉に寄稿し、当時のチェコ文学のスノビズム、デカダン派のモダニズム、出口のない同情と嘆きにみちたシュード・ソシアルナリリズムの文学を攻撃する一方、自らの作風も従来のヴァガボン小説から社会批判的観点の強い諷刺的散文へ変っていった。このようにして、ハシェクとアナキストの運動との関係は、1907年頃一応頂点に達し、〈コムナ〉誌の編集を引きうけ、労働者の集会で講演にたつなどの活動をつづけるうちに、ついにアナキストの5月デモに参加して逮捕、拘留されるという事件が起る。

8 Michal Káčh (1874-1940). チェコ・アナキスト運動者の一人。靴屋だったが後出版屋に転じ、一般に廉価版図書出版の先駆者として著名。

9 Stanislav K. Neumann (1875-1947) チェコ民族の社会的進歩のため戦った草分の一人。またチェコ現代文学の開拓者。

10 Karel Vohrysek (1876-?) チェコ・アナキストの特異な存在。本文にあげた4つの雑誌のほか、「アナキズムのアルファベット」を著作、外国のアナキストを翻訳によってチェコに紹介。1918年ブラジルに亡命。その後消息不明。

そのときの裁判のエピソードは、『シュベイク』小説の主人公を彷彿させるところの、アナーキスト・ハシエクのまさにハエック的性格というべきものを象徴しているように思われるので、簡単にふれておきたい。

デモの群によって地面に投げつけられた警官は、ハシエクが「あいつをやっつけろノ」 („Haut ihn!“) と叫んで群衆に行動をけしかけた、といいはった。それにたいしてハシエクはこう説明した。「わたしはデモ隊をけしかけたんじゃないありません、なだめようとしたんです。そのためわたしは『あいつをやっつけろノ』じゃなくって、『あっちにきをつけろノ」 („Schaut hin!“) あいつもわしらと同じ人間じゃないかノ』って叫んだんです。おそらくみんな興奮していて人間らしい愛国的な意味あいのこの注意を誤解したんでしょう。」そのあと行われた裁判はまるでとっぴなコメディであった。

裁判官 「あなたは弁護士をつけないんですか。」

ハシエク 「はい、わたしはその人を家に忘れてきました。」

犯した罪を裁判官に責められると、ハシエクは、警官にいったのと同じ調子で自己弁護した。「わたしは『あいつをやっつけろノ』と叫んだのではなく、『あっちにきをつける』といったんです。」

警官はあくまで被告と対決した。「群衆をけしかけたのは、まちがいでなくこの男です。」

「まだ何かいうことがあるか」と裁判官はハシエクに訊ねた。

ハシエクは眉をつりあげた。「たぶんわたしは二重人格なんでしょう。」

裁判官は狼狽して眼をぱちぱちさせた。「二重人格だって?」

「その通りです」とハシエクはうなずいた。「あなたはドストエフスキーの物語を読んだことがないですか?」

それから彼は、奇妙なしかめっ面で、ドストエフスキーの物語をとうとうとしゃべりだした。裁判官の制止もきかず話をつづけた。法廷の聴衆は声をたてて笑い出した。裁判官は被告を退場させ、被告に一週間の懲役を言渡した。ハシエクは二週間の拘留によってその刑期をすませってしまった。ハシエクが二重人格について訴えつづけるので、裁判官も笑いだした。

このエピソードを伝えるヤノーホは、愚直を仮装し、上官を煙に巻く小説『シュベ

イク』の主人公の生き方、話術が、アナーキスト・ハシュクによってこのとき初めて実演されたと述べている。

その後、ほぼ3年間、ハシュクは、恋人ヤルミラ (Jarmila Mayerová) との結婚の条件として、彼女の父から身なりを改め、定職をもち、アナーキストと関係を絶つようきびしくいふくめられたため、一時アナーキズムの運動から遠ざかり、雑誌〈動物界 (Svět zvířat)〉編集の定職につき、結婚後は夫婦で〈犬研究所〉をもち、犬の飼育、売買もやり、自己の文才で世帯が保てることを実証せんがためにも大いに書きまくり、毎日なにか一作書きあげたといわれているほど彼の生涯で最も多産な一時期を送るのだが、その頃の体験、特に動物の体験は、後ほど『シュベイク』小説の主人公、「犬屋シュベイク」のせりふや行動のなかで豊富に生かされている。

それはさておき、アナーキスト・ハシュクを知るうえでこの期間の最も重要な事件は、彼が、1911年春、〈法律の枠内における穩健なる進歩党¹¹〉という政党を樹立し、その年の総選挙にも立候補したことである。立党集会は、ズベルシナというおやちの経営するプラハの料亭〈牛小屋^{クラグゼン}〉で行なわれた。料亭の窓と、附近の街路でくばられたピラには、こう書かれていた：

「選挙民よ、メキシコにおける地震の恐怖にたいし、反対投票せよ、そして法律の枠内における穩健なる進歩党の立候補者、ヤロスラフ・ハシュクを選べ、ズベルシナの料亭に来れ。道徳堅固な少年は対立候補者を誹謗する術を習得させるため即刻徒弟に採用される」

この立党集会は市民の間にセンセーションをまき起し、大勢の労働者、役人、サラリーマン、さらには新聞記者や政治家までが、それまで名の知れていなかった料亭へおしよせてきた。集会は古いアナーキストの歌の変え歌で始まり、ハシュクが演説し、討論が行われた。

この、いわば〈ハシュク党〉が、どのような意図で組織されたのか、政治的な野心

11 チェコ語は, Strany mírného pokroku v mezích zákona (独訳, Partei des mäßigen Fortschrittes in den Grenzen der Gesetze.) なお, ヤノーホによれば, Max Brod が彼の自伝 Streitbares Leben (München, 1960) で, このパルタイのことにふれているが, „Fortschritt” を „Rückschritt” と誤訳しているとのこと。また, カフカとチェコ・アナーキストとの関係については, いまではかなりのカフカ書にとりあげられているが, 特に G. Janouch: Franz Kafka und seine Welt. S. 97-104 参照のこと。

に基づくものか、それとも反政治的な政治的行為にすぎなかったのか、この点については議論の余地があり、ペトルとヤノーホでも受けとめ方が多少異なっている。

ハシェクの行動が、当時のチェコの政党、特にブルジョア階級に飼いならされて日和見主義に陥っていた社会民主党及びそれら政党の選挙公約にたいする痛烈なパロディであり¹²、諷刺であり、さらに大きな観点からいえば、オーストリア・ハンガリー帝国の権力機関、官僚組織にたいする彼の根源的な嫌悪に根ざしているという点では両者の見解はほぼ一致している。しかしペトルが、ハシェクの諷刺の精神を専ら社会・政治批判的観点のみから説明しているのにたいして、ヤノーホは、ハシェク党設立の動機が経済的関心、すなわちズベルシナの旅館〈牛小屋〉の売上げを高めることにあったとのべ、ハシェクにとっては立候補もそれにまつわる政治論議も単なる料亭の冗談ごとにしすぎなかったと断定し、むしろそこに『シュベイク』につながるハシェクの人間性を強調しようとしている。

いずれにせよ、言葉の道化師ハシェクの弁舌に、満員の聴衆は拍手喝采し、立会いに来た他政党の政治屋はいい負かされてすすすす退散し、料亭のおやぢは一躍店の名があがってほくほくになり、立候補をまじめに受けとった妻ヤルミラとその一族は堅気な新夫の活躍に誇りをもち、将来の夢をかけた。しかし選挙の結果、ハシェクの得票は彼のとりまきと料亭のおやぢだけという惨敗ぶりであり、他政党は何らの実害もこうむらなかつた。実害を受け、夢をうちくたかれたのは妻ヤルミラだった。ハシェクは、妻の幻滅をとりつくろい、その一家にたいし体面を保つためにも、妻と共同で、さきにあげた〈犬研究所〉を設立して、研究所所有者ということでようやく堅気の面目を保った。しかし1年後にはその妻にも逃げられてしまう。従って、ハシェク新党事件は、彼の家庭にとっては短かい2年間の同居生活における夢と幻滅の幕間狂言にすぎなかつたといえるだろう。結局ハシェクは政治家ではなかつたし、政治家たることを意図してもいなかつたのだ。彼の使命はあくまで文学にあった。残念ながら私はまだ読んでいないが、最近全集の一巻として刊行された『法律の枠内における穩健なる進歩党の政治的社会的物語』の分析によってこの時期におけるハシェクの行動と文学の

12 ペトルもチェコ・アナーキストと政治との関係を説明するさい引用しているレーニンのテーゼ「アナキズムは労働運動の日和見主義的な罪過にたいする一種の犯罪であった。両者の奇型的発生は互に補いあっていた。」(Der „linke Radikalismus“, die Kinderkrankheit im Kommunismus.) 参照。

評価もさらに明確なものになるであろう。

4

さて、ハシェクの伝記上さらに重要な問題点となるのは、大戦に参加し、ガリシヤ前線で自らロシア軍の捕虜となり、その後10月革命を転機にして、「チェコスロヴァキア兵団¹³」から赤軍に身を投じ、共産istになったハシェクが、1920年再び故国へ帰還したその時の動機、心境の問題である。ペトルによれば、この問題は、1919年から20年にかけて、第5軍の政治局委員、国際部長、組織部長、政治局指導者と短期間のうちに赤軍の要職に抜擢され、軍の日刊紙〈われらが道〉^{アシニ・アヂ}〈赤い狙撃兵〉^{クラスヌイ・ストレロフ}、国際版週刊紙〈赤いヨーロッパ〉編集をも兼ねるという重要な地位に昇進していたハシェクが、1918年10月親西欧民主主義者マサリクのもとに国民民主党と社会民主党との連立内閣によって発足した故国チェコスロヴァキア共和国における社会民主党左派勢力交援のため、当時モスクワで創立されたチェコスロヴァキア・共産ist指導部の指令で多くの同志と共に地下運動員として故国に派遣された、というふうに説明され、それが定説のようである。しかし、反革命軍との戦いに献身していたハシェクが、イルクーツクの前線からモスクワを経てプラハへ帰ったのは、1920年のいわゆる「12月ゼネスト」の敗北でチェコのボルシェヴィキ革命が挫折し、新生チェコの資本主義国としての進路が決定的になった直後だった。革命の高揚を期待していたハシェクは、この状況に幻滅し、小説『シュベイク』の執筆にとりかかる、——そのような経路で、一応、表面的には間違いないかもしれないが、私にはやはり疑問が残るのである。ソヴィエトの「人民委員」ハシェクと彼の故国での「幻滅」、さらには「絶望」との間の深いギャップは、うえのような表面的経過だけでは十分納得しえない。〈社会民主党左派〉は、12月ゼネストの弾圧で革命の実現を阻まれたとはいえ、翌年5月には独立

13 1916年6月、ロシア軍の捕虜となったチェコスロヴァキア兵によりキエフで編成された兵団。オーストリア・ハンガリー前線に投入される計画だったが、10月革命の結果ツァー側に加担し、ボルシェヴィキと戦わねばならぬ羽目になった。その後アンタント（聯合軍）側の指令（日本のシベリア出兵と同様のいわゆる「干渉」政策）によりコルチャク率いる反革命軍に所属し、ウクライナ、シベリアと転戦した運命についてはここではふれないが、ハシェクは赤軍に転向したため、兵団から逮捕状を出されていたこと、彼が彼の所属した赤軍の第五軍団とともに同国人の反革命兵団との戦いを余ぎなくされたことだけつけ加えておく。

して正式に〈共産党〉として発足し、それにはノイマン、オルブラフトなどかつてのアナーキストたちが多数参加しているのに、故国で共産党を創立すべく「委託」を受けていたはずのハシエクは、何故それに参加しなかったのだろうか。赤軍に参加してから、3年間完全に好きな酒を絶ち、戦前の彼を知る同郷人から全く人が変わったと評されていた赤軍の要人ハシエクが、帰国後再びもとの飲み友達にのみ友を求め、プラハから姿をくらまして片田舎のリプニツェで隠遁同様の晩年をすごさねばならなかったのは何故だろうか。

ヤノーホのハシエク伝は、政治からも世間からも自己自身からさえも^{とうかい}韜晦しようとしたかにみえる晩年の、つまり『シュベイク』執筆時代のハシエク像を、ペトルとは別の側面、つまり、ロシアでえた新しい妻アレクサンドラ・ガブリロブナ・リボフ、愛称シュエーラ (Alexandra Gawrilowna Lwow, Schura) との関係から照し出している。

ヤノーホによれば、ハシエクは確かにモスクワの第三インターからの指令に従ってプラハへ赴いた、しかしそれは、同時に、新しい妻シュエーラを同伴した、革命ロシアからの「逃避」行でもあったのだ、ということになる。ヤノーホはそのことをハシエクの友人たちの証言、ハシエクの以前の妻ヤルミラ宛書簡、シュエーラが彼に語った言葉などから立証している。それにしても何故ハシエクは逃避しなければならなかったのか。シュエーラは表向きには彼が編集していた軍の機関誌〈赤い狙撃兵〉の「印刷工とし働いていた¹⁴」ことになっているが、それはハシエクによって仕組まれた「細工」であって、実のところ、彼女は、反革命の戦いに加担していた廉で捕えられ、投獄されていた。そこでハシエクに救い出され、彼の許で働き、彼の妻になった。ハシエクは、シュエーラだけでなく、シベリヤで四分五裂になった反革命側のチェコスロヴァキア兵団の兵士たちをも多数救助した。そのほかにもハシエクはシベリアの戦いで故国〈マザリク共和国〉のために戦っている同国人の兵団の無軌道ぶりをつぶさに体験して、祖国へ帰るよりもむしろシベリアに踏み留まる決心でいた。シュエーラとの結婚もその決心の現われだった。しかし反革命のシュエーラや「兵団」の同国人の命を助けたため、彼自身が処刑される危険もあった。祖国にボルシェヴィキ党を打ちたてるため

14 栗栖訳『シュベイク』下巻「あとがき」444頁。なお、ペトルはハシエクの重婚問題に全然ふれていない。

動員の指令を受けたハシエックは、結局、シューラを連れて血なまぐさい革命の渦中を避け、プラハへ帰った、というのである。

もしヤノーホの伝える通りであるとすれば、赤軍の兵士となり、コミサールとして活躍したハシエックの思想と行動そのものが疑わしくなってくる。ベトルは、アナーキストのハシエックがチェコスロヴァキア兵団所属時代のナショナリスト・ハシエックを経てコミニスト・ハシエックへと転身してゆくイデオロギー的發展のプロセスを、正反合の弁証法的論理、つまり、組織の拒否に基づく社会批判（アナーキズム）の時期と社会認識の面で後退しながらアナーカルな個人主義を棄却し組織的な闘いの必要を認識する（ナショナリズムの）時期とのジレンマとして社会革命に献身する（マルキシズムの）時期にたどりついた、というふうに説明しているが、ハシエックの場合、そのように直線的には説明しつくせないところの、いわば垂直的に彼の人間性に深く根ざしている矛盾が各時期それぞれに内在している。そしてそれが彼の限界であると同時に、彼の自己が深まってゆく契機になっている。しかし革命がユートピアとしてある限り、馬の鼻先にぶらついた人参のように、革命によって矛盾は克服されうる。個人主義的なアナーキズムも、汎スラヴ主義につちかわれたナショナリズムも、それぞれ矛盾をはらみながら、権力をトータルに否定する社会革命へと止揚されてゆく。ハシエックがフロントを転換して「兵団」から「赤軍」へ移ったのもそのためだった。しかし彼が、自らロシア革命を体験し、革命の勝利のなかで、パルチザンの赤軍の加速的な強大化、組織化が達成され、いつの間にか自分自身が権力者の地位にのしあがっていることに気づいたとき、彼に固有の反権力の思想との自己矛盾が、ここで最終的に大きく口を開く。そしてこの矛盾は、作家ハシエックの内部で、抽象的な権力組織の言葉と、物質的肉体的な民衆の言葉との間の内面的な戦いとして深まってゆく。コミニスト・ハシエックの自己矛盾の行為から『シュベイク』執筆にいたる彼の思想の移りゆきを私はそのように理解する。

周知のように、小説『シュベイク』は未完のまま残された。しかしヤノーホの描く晩年のハシエック像によれば、未完の事実は、ハシエックの病死の結果とばかりはいえないようである。ハシエックは、「ロシアにおけるシュベイク」のプランをもちながら、それが書けなかった。むしろロシア軍の捕虜になってからのシュベイクについて次第に口をとぎすようになったといわれている。このことは、それまでの部分を口述筆記

までさせて一気呵成に作りあげたハシェクの意欲ぶりからして信じられないように思われる。しかし、おそらくそこにプラハ帰還後ユートピアの羽撃く翼を失ったハシェクの限界が反影されているのかもしれない。翼を失うとともに、革命達成後のロシアの状況、それと連関して故国チェコの状況を見透すホリゾンをも消失してしまったハシェクにたいして、革命の夢を未来に託したオルブラフトの『プロレタリア・アンナ』のごときロマンは望みえない。しかしその弱点を文学の勝利に導きえたこと、つまり現実の消失を言語の現実化によって克服しえたこと、そこに何よりも作家ハシェクの成功の秘密と『シュベイク』の不朽さが隠されていると思われる。

5

多少紹介の域を脱してしまっただが、以上ハシェクの生涯から二つの問題的な時期をとりあげ、ペトルとの比較対証においてヤノーホの含蓄多いハシェク伝から私が読みとった限りの私なりの結論をのべてみた。しかしそれはあくまで『シュベイク』解釈のためのひとつの前提にすぎない。冒頭でものべたように、もうひとつ、われわれが『シュベイク』を解釈する場合の参考として、チェコ国内における『シュベイク』解釈史の問題をとりあげるつもりでいたが、予定の枚数も残り少なくなったので、いまはごく簡単にその要旨を紹介するにとどめたい。

そのまえにぜひともふれておかねばならないことがある。それは『シュベイク』の文体の問題である。チェコ語を独習し始めたばかりの私にはその問題に深くたちいる資格はないが、ペトルによれば、『シュベイク』の文体は、文語（文学語）体ではなく、非文学的な文体、しかも、それをさらに口語、社交語、方言と三つに分類して、シュベイクのせりふは社交語、将校のせりふはいわゆる口語で主として書かれているという。このような非文学語の使用によって、ハシェクは、単に人物の性格描写にとどまらず、従来のガラス張りの文語体文学では表現されえなかったところの、民衆、民族に固有のもの考へ方や、感じ方を、チェコ文学史上初めて、散文的に造形することができた。この点を『シュベイク』解釈上の重要なポイントとして念頭においておかねばならない。

さて、ペトルは、チェコにおける『シュベイク』解釈の歴史を次の四期に分けている。

1. 1921年から1926年まで、コミニスト批評家により、作品の文学的性質が問題にされた時期。
2. 1926年末から1928年春まで、外国における『シュベイク』の好評と相まって、コミニストのみならず公の文壇批評家も加わり、作品の社会的政治的規準に基づく評価が行われた時期。
3. 1928年春から1945年まで、E・F・ブリアン演出の戯曲『シュベイク』¹⁵、ラマチ監督の「映画シュベイク」¹⁶などの上演もあり、『シュベイク』がアクチュアルな同時代意識で問題にされた時期。
4. 1945年から現在まで、ファシズムに対する闘士としてのシュベイク像が否定され、同時代意識にかわって、作品の歴史的立場づけが問題になってきた時期。

これら四つの時期の推移とそれぞれの時期に登場する批評家たちの論争内容を詳しく紹介してゆけば、第一次大戦後から現在に至るチェコ現代史の運命とからみあう文学者・知識人の動向が微妙にシュベイク解釈の歴史に反影されていることがわかり、たいへん興味深い問題になるのであるが、ここではそのうちの重要な発言内容と傾向だけを指摘したい。

ハシエクの『シュベイク』を、最初に「新しい世界文学のタイプ」「反戦小説の新しい形」と評価したのはコミニスト作家オルブラフトだった。『シュベイク』の第一冊が出版された直後、そして文壇公認の批評家たちがそれを卑俗な三文小説として無視していたとき、正当な評価を与えたのはオルブラフトが党機関誌〈ルデー・ブラーヴォ〉(1921. 11. 15) にのせた書評のみだった。彼につづいて、デモクラットのアルフレッド・フックスもユーモアの観点から作品を評価したが、彼はその笑いを時代

- 15 E. F. Brian 演出のこのドラマは、プラハの彼の劇場「D 35」で1935/36年に上演された。アクティヴなシュベイク像の一例で、最後にシュベイクは「いまいましい、馬鹿野郎ども、射つのはやめろ、ここにいるのは人間ぢゃないか！」と叫ぶ。
- 16 『シュベイク』の映画化はかなり頻繁に行われた。先づ、1926/27年の Karel Lamač など演出によるもの。次に1927年 Gustav Machatý 演出「市民シュベイク」、1931年には Martin Frič 演出のトキー映画。ソ連でも1941年にK Zのシュベイク映画と1943年の「シュベイクの新たな冒険」がある。なお、大戦中ロンドンで上演されたシュベイク映画は亡命した Lamač が演出し、ナチ占領下のシュベイク像が描かれた。これはブレヒトによる反ファシズムのシュベイク解釈の先駆とみなされる。

の混乱からの逃避として把握した。しかし、『シュベイク』解釈史の上で各時期にわたり最も積極的な役割を果たすのは、ユリウス・フチク¹⁷である。彼の解釈は、一貫して、シュベイク像の個性的民族的性格をこえた普遍性の強調におかれているが、第一期では、文壇や大学の講壇にたつ批評家に楯突きながら、ハシェクによるチェコ国語のカノニゼーションを高く評価し、シュベイクとサンチョ・パンサとの連帯を説くなど、その小説を一種「ダダ的な作品¹⁸」として文学的に普遍化しようとしている。第二期は、文壇批評家がシュベイクを単なる「仮病患者」「脱走者」とする従来の否定的評価から目覚めて、そこに大戦前、大戦中における民衆の態度が具体的に表現されていることを認め、いわばハシェクを公けに「復権¹⁹」させた時期であるが、それには『シュベイク』の国際的な反響に刺激された面が多分にあり、チェコ国内では、シュベイク像の一般化とともに、主人公のモラルをめぐる、議論の対立が表面化していった。それをうけて、第三期は、詩人ヴィクトル・デイク²⁰の激しい主人公攻撃で始まる。支配階層のナショナリズムの背景のもとに、彼は、シュベイクを、戦うことができるのに戦おうとしない国民は力不足で戦おうとしてきた国民より悪い、という

17 Julius Fučík の『シュベイク』論には次のものがある。Pustý ostrov, Švejk a universita (孤島, シュベイクと大学) 1926. Válka se Švejkem (シュベイクとの戦い) 1928. Čehona a Švejk, dva typy z české literatury a života (チェコの文学と生活にあらわれた二つのタイプ, チェホナとシュベイク) 1939. 最後の評論を除く2篇は、Julius Fučík: Stati o literatufě, 1950. の、独訳 Literarische Kritiken, Polemiken und Studien, Berlin 1958 に収められている。この独訳には、フチク未亡人の60頁にわたるフチク伝がついており、その意味でも重要な文献である。

18 この解釈は、Opelik, Jiri: Fučík jako kritický vykladač Haškova Švejka (オペリク『ハシェクのシュベイクの批判的解釈家としてのフチク』) による。ハシェクの作品を Dada と結びつける解釈は、同時期の Bedřich Václavěk にもみうけられ、彼はハシェクを「民衆的ダダイスト」と特徴づけている。『シュベイク』は、伝統的文学破壊の反文学的作品という意味、あるいはアナーキスト・ハシェクと連関させて、確かにダダ的といえる面をもっているが、時代からの逃避が基本的態度になっているダダイストの場合とハシェクとは根本的に異なっている。なお、アナーキストとダダイストとが結びついている典型としては Hugo Ball があげられる。この点については、Miklavž Prosenč: Die Dadaisten in Zürich. Bonn, 1967. S. 95~100 参照。

19 J. O. Novotný: Rehabilitace Jaroslava Haška. (セロスラフ・ハシェクの復権) 1927.

20 Viktor Dyk, Hrdina Švejk (主人公シュベイク) 1928.

ふうに批難し、笑いのうちに「ならず者」を範例化する小説『シュベイク』の危険を訴えた。このデイクのシュベイク論とともに、フチクもいうように「シュベイクをめぐる論議」(Ein Kampf um Schweyk)は「シュベイクとの戦い」(Ein Krieg mit Schweyk)に転化した。そこでフチクは、シュベイク防衛の筆をとり、デイクの批難は逆にブルジョアへの愛情に支えられていると反論し、シュベイクを、陽気であるばかりでなく、批判的なタイプの人間、しかも、オーストリア・ハンガリー帝国軍隊内における下層兵士としてだけでなく、インターナショナルなタイプの人間、つまりあらゆる帝国主義的軍隊における兵士のタイプとして時代の全構造連関から普遍化して解釈した。デイクへの反論によって、フチクは、前期における『シュベイク』の文学的価値評価から現存社会秩序に対する日常的な戦いのための現実的価値評価へと評価の視点を変えた。このデイク・フチク論争で『シュベイク』解釈史は新しい局面にはいり、作品の解釈はアクチュアルな問題となったが、フチクの新しいシュベイク解釈の背景には、シュベイクが立ち向った国家機構、オーストリア・ハンガリー帝国とチェコ共和国の国家機構の間には本質的な差異がないというコミニスト・フチクの現実認識があったのである。このように、シュベイクの国民的、すくなくとも歴史的民族的な面をわきにおいて、階級的な面を強調する解釈、しかもそれを同時代的に第三インター的な国際的基準と符合させる解釈には、作品に即してみる限り、確かに矛盾があった。そこでフチクはさらに次の論文でその矛盾を、作品における主人公の意識の内面的発展によって立証しようとした。フチクのいうように、シュベイクの意識が帝国主義の狂気に対する諷刺的な自己防衛から攻撃へ、単なるウィットから真面目な反抗精神へと変化してゆく過程が、作品『シュベイク』にそれほど明瞭に読みとれるかどうか、その問題を解決するには緻密な作品分析が必要である。しかしこのような解釈の傾向は、実際には、原本のシュベイク像からはみ出て、フチクよりもさらに強く、さきにあげた『シュベイク』の戯曲化、映画化に極めてはっきりと現われており、そこでのシュベイクは、軍隊組織、権力的な軍人精神への諷刺にとどまらず、戦争一般、特にファシズムにたいする反抗者に変貌している。ブレヒトの有名な『第二次大戦中のシュベイク』がナチズムにたいする戦いに動員されたシュベイク像としていまなお上演されていることは周知の通りである。しかしシュベイクをファシズムにたいする斗士として解釈する試みは、戦後のチェコでは否認され、『絨首台からの

レポート²¹』をのこしてフェシズムの犠牲になったフチク自身がそれに代って国民的英雄になった。全集の編者アンチクも「人民の支配しているところでは、当然のことながら決してシュベイクのような人物は現われてこない、シュベイク的な行動はとりえない」と書いている。けれども、このことは決して『シュベイク』そのものの否認ではなく、むしろ同時にフチクの『シュベイクはあらゆる帝国主義的軍隊に特有のタイプ、帝国主義的国家秩序一般と戦うタイプである』というテーゼの確認でもあった。だからアンチクも『シュベイク』を「帝国主義的戦争にたいする非常に天才的な諷刺」とよんでいるのである。戦後の40年代50年代におけるこのような解釈には明らかに矛盾が感じられるが、それはおそらく、戦後の混乱から社会主義国として再出発したチェコにおいて国民的英雄視されたフチクが、文学面において過大評価をうけたことと関連しているように思われる。しかしながら、戦後の解釈が、シュベイクを同時代的にアクチュアライズした以前の傾向を否定して、作品の歴史的な位置づけの方向をとったことは、他方で、作品を作品そのものとして分析する可能性の余地を与えることにもなった。そしてその成果が、60年前後から、ラトコ・ピトリークやミラン・ヤンコヴィチの論文にあらわれ始めた。ヤンコヴィチの「シュベイクは必ずしも一定社会層の代表とはみなされない」というテーゼは、フチクの階級意識的な解釈の明らかな拒否であり、さらに彼は、シュベイクの「より深い民族性の認識を妨げるところの機械的な社会主義的立場を克服する必要がある²²」とのべている。彼の場合、この「民族性」という概念は、民衆の現実生活の直接的表現のみならず、民衆のなかにあっているつかは世界をラディカルに変える可能性のあるひそかな力の表現をも含んでいる。そしてそのような意味で『シュベイク』を「チェコ社会主義文学の始まり²³」と考えるのである。彼の所論は、作品の綿密な分析に裏づけられており、最近の『シュベイク』解釈は、いくつかの時期を経て、ふたたび出発点の文学的評価の問題に移ったといえる。しかし冒頭でものべたように、小説『シュベイク』を文学的芸術作品として理論

21 J. Fučík: Reportáž psaná na oprátee. 独訳 Reportage unter dem Strang geschrieben, Berlin, 1952. 邦訳もある。

22 Milan Jankovič: Lidové postavy v Osudech dobrého vojáka Švejka (善良なる兵士シュベイクの冒険における民衆的人間像) 1950. 彼には、そのほか Umělecká pravdivost Haškova Švejka (ハシェクの作品『シュベイク』の芸術的真実性) 1960. などがある。

的に基礎づける試みはまだ緒についたばかりで、ピトリークもいうように、「ハシエクは認められ、推賞され、称揚されるけれども、今日なお、われわれは十数年前のオルブラフトよりそぐたいして進んでいない²³」のが現状のようである。

「あ と が き」

〔註〕 にあげたチェコ語文献及び本文におけるその引用は、Fučíkを除き、おおかた P. Petr の著書に依ったことをおことわりしておかねばならない。なお、拙文脱稿直後、「週刊読書人」第721号（昭43.4.15.）で吉田仙太郎氏の「ヤノーホの死を悼む」という文章を読み、本稿でとりあげた『シュベイク伝』の著者が、去る3月10日、チェコ政変のなかで病死したことを知った。この作家の数年来の愛読者として、深い哀悼の意を表したい。

23 Radko Pytlík: Hašek literární a neliterární (文学的ハシエクと非文学的ハシエク) 1959.